

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第七十三回）

ひんきゆうもんどうか

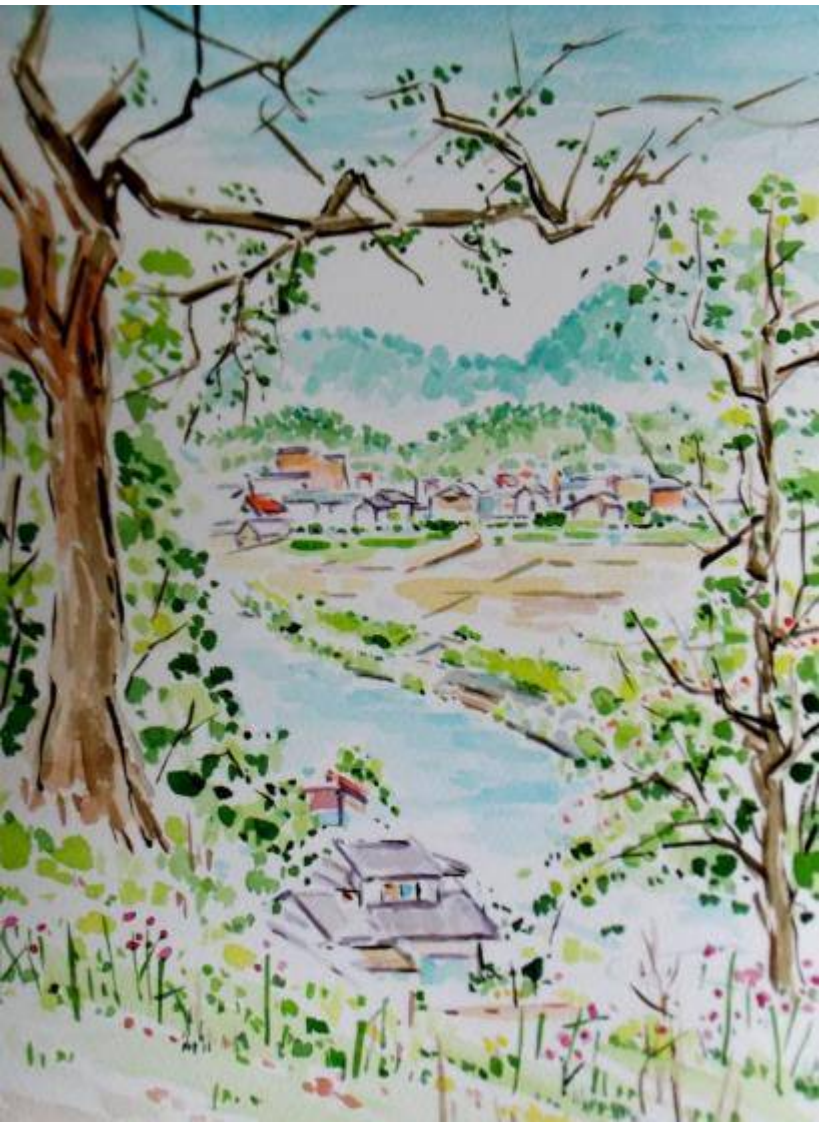
「貧窮問答歌」

・万葉歌人・山上憶良が筑前国守ちくぜんこくしゆ（筑前の国の長官）に赴任したのは神龜三年（726）頃で任期を終えて帰京したのが天平四年（732）末頃といわれている。なお、筑前の国は、現在の福岡県中部から北西にかけての地であった。

・「貧窮問答歌」は、山上憶良が筑前国守在任中、管内巡視中に農民達の貧困の状況を見聞きすることで生まれた作品であろうとの説が多い。

（写生地）山上憶良が管内巡視した地であることが万葉集（巻五―802）

に詠われている「嘉麻郡」かまのこおり、現在の福岡県のほぼ中央部に位置する嘉麻市一带を同市稲築公園から描く。（杏花）



・「貧窮問答歌」の内容は、かたしお 堅塩を肴さかなに糟湯酒をすすする男と、かまど 竈を使って炊く米すらない貧者と窮者との二人の問答という形式で当時の農民の貧しい暮らしぶりを詠んだ歌であるとの説がある。

・左記に二人の農民が貧窮の実態を問答の形で詠まれた長歌「貧窮問答歌」の前半（貧者）と後半（窮者）の中で貧しく苦しい生活を述べ合ったところが詠まれた歌のである。

＝貧者の問い＝

かぜまじ 1) 風糴り よ 雨降る夜の あめまじ 雨糴り 雪降る夜は

すべ 術もなく かたしほ 寒くしあれば 堅塩を 取りつづ

かすゆさけ しろひ 糟湯酒 すす うち啜ろひて・・・

(解説) 風にまじって雨の降る晩で、その雨にまじって雪の降る晩は、なすすべもなく、寒くてたまらなければ、焼き固めた堅い塩を少しづつ食べては、湯に溶といた酒粕さけかすをすすり。(貧しくて本物の酒を飲めない)・・・

* 「取りつづしろひ」とは少しづつ食べることを。

* 「堅塩」とは精製していない固まった塩。粗製の塩。

* 「糟湯酒」とは酒のカスを湯で溶かした飲み物。

●自分はこのように貧しく暮らしているが、君はどんな風にして暮らしているのだね。と貧者が窮者に尋ねる。

|| 窮者の答え ||

かまど

ほけ

こしき

2)・・・竈には 火氣吹き立てず 甑には

くも

す

いひかし

こと

蜘蛛の巣かきて 飯炊く 事も忘れて・・・

かまど

(解説)・・・竈には煙が立つこともなく、

こしき

甑には蜘蛛が巣をかけたまま

で(穀物が手に入らないので)飯を炊くことも忘れて・・・

作者・山上憶良 卷五―892

*古代の煮炊き用の設備は左図のように下部は「竈」で裾が広がり円筒形で前面に火の焚口たきぐちが大きく開き、側面に一對の取っ手孔がある。
・竈の上部に乗る「甑」は米など食物を蒸したり炊いたりする道具である。



(参考文献) 日本古典文学大系「萬葉集」九州歴史資料館発行「貧窮問答歌の世界」、

桜井 満著「万葉を知る事典」他